

# 吉藏の成仏不成仏觀（三）

末光愛正

## 序

既に「吉藏の成仏不成仏觀」<sup>(1)</sup>並びに「吉藏の成仏不成仏觀」<sup>(2)</sup>と題して、①三界外にて仏に会い法華教を聞き廻小入大する者は、縁覚の果人並びに羅漢、②三界内にて仏に会い法華教を聞き廻小入大する者は、縁覚の因人並びに声聞の三果並びに羅漢、③三界の内外でも廻小入大する事が出来ぬ者は、増上慢の一乗で、④増上慢の二乗は不成仏であるが、それ以外はいづれか成仏する事等を論じた。そこでこの統きとして、成仏不成仏を決める正因仮性と縁因仮性について、吉藏（五四九—六二三）の考え方を論述する。

## 一、正因仮性と縁因仮性<sup>(3)</sup>

法華經が仮性を説くか説かないかについては、当時次の様な評価を受けていた。

旧云く、法華經には但だ善人のみ仮性ありと明して、涅槃經に始めて心あるもの皆成仏を得と弁ずと。（法華義疏 卷第十一、T三四・六一六中）  
即ち法華經には善人のみ仮性があり、涅槃經の様に一切衆生悉有仮性とは説いていないと云う評価である。又『法華遊意』中には、

有人言、此經明「因未弁仮性、但明万善緣因成仏、望前三乘之因故名為妙、若望後涅槃正因仮性「未是妙也、今以三十種文義推之不」同此积、（後略）（T三四・六四二上）

と、法華經が万善の縁因成仏のみを説くだけで、涅槃經の様に正因仮性を説いていないと評価されていた。

これらの旧説や有人説に対し吉藏は、法華教には正因仮性と縁因仮性の二つが説かれるとして主張する。例えば、今明因果異<sub>ニ</sub>旧因果、所<sub>レ</sub>言因者、具<sub>ニ</sub>足<sub>ニ</sub>一因、一者仮性、

二者縁因、以<sub>ニ</sub>衆生有<sub>ニ</sub>仮性<sub>ニ</sub>故、修<sub>ニ</sub>万行<sub>ニ</sub>方得<sub>ニ</sub>成仏<sub>ニ</sub>也、  
(法華玄論、卷第一、T三四・三八二上)

或は、

問、若尔一切衆生皆有<sub>ニ</sub>仮性<sub>ニ</sub>、皆應<sub>ニ</sub>授記作仏<sub>ニ</sub>、答、不然、仮性有<sub>ニ</sub>二種、一正因、二縁因、一切衆生雖<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>正因、無<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>行解等善<sub>ニ</sub>故無<sub>ニ</sub>縁因<sub>ニ</sub>、無<sub>ニ</sub>縁因<sub>ニ</sub>故不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>作仏<sub>ニ</sub>、(前同、卷第一、T三四・三六九上)

と、仮性には、一切衆生悉有仮性の内容に相当する正因仮性と、万行や行解等の善を修する所の縁因仮性がある。この正因と縁因の一仮性が共に成立して初めて作仏可能となると考える。これを乳と酪性と燔等の関係にたとえる。

問、開<sub>ニ</sub>衆生仮知見<sub>ニ</sub>、為<sub>レ</sub>弁<sub>ニ</sub>縁因成仏<sub>ニ</sub>、為<sub>ニ</sub>正因成仏<sub>ニ</sub>耶、答、由來云、但明<sub>ニ</sub>万善縁因成仏<sub>ニ</sub>耳、前已評竟、今更

責<sub>レ</sub>之、既但明<sub>ニ</sub>縁因<sub>ニ</sub>未<sub>レ</sub>弁<sub>ニ</sub>仮性<sub>ニ</sub>云何成仏<sub>ニ</sub>、如<sub>レ</sub>乳無<sub>ニ</sub>酪性<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>酪、若乳無<sub>ニ</sub>酪性<sub>ニ</sub>而成<sub>ニ</sub>酪者、水無<sub>ニ</sub>酪性<sub>ニ</sub>何不<sub>レ</sub>成耶、今明、仮知見即是仮性、以<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>仮性<sub>ニ</sub>復修<sub>ニ</sub>行万善、因縁具足乃得<sub>ニ</sub>成仏<sub>ニ</sub>也、(法華玄論、卷第五、T三・四・四〇四上)

或は、

仮性者然果、得<sub>レ</sub>生唯有<sub>ニ</sub>二種、一正因、二縁因、如<sub>レ</sub>乳

有<sub>ニ</sub>酪性<sub>ニ</sub>要具<sub>ニ</sub>一因<sub>ニ</sub>、乳為<sub>ニ</sub>正因、燔等法為<sub>ニ</sub>縁因<sub>ニ</sub>、衆生有<sub>ニ</sub>仮性<sub>ニ</sub>亦具<sub>ニ</sub>一因<sub>ニ</sub>、一者衆生是正因、二者仮<sub>ニ</sub>信解等法

以為<sub>ニ</sub>縁因<sub>ニ</sub>、是以法華但明<sub>ニ</sub>二因<sub>ニ</sub>也、(前同、卷第七、T三四・四二〇中)

と、乳の中には酪性がそもそもあるから酪となるのであり、酪性のない水は酪とはなりえない。又酪性のある乳を燔める等の縁因があつて初めて酪となるのである。即ち乳の中に酪性が有ると云う事に相当する正因仮性と、燔める等に相当する信解等の万善の縁因仮性の二つがともに成立して成仏出来る。この正因仮性と縁因仮性の二仮性を、法華教は説くと吉藏は主張する。これらの事は『涅槃經』の、

因有<sub>ニ</sub>二種、一者正因、二者縁因、正因者如<sub>ニ</sub>乳生<sub>ニ</sub>酪、

縁因者如<sub>ニ</sub>酵煖等、從<sub>レ</sub>乳生故、故言<sub>ニ</sub>乳中而有<sub>ニ</sub>酪性<sub>ニ</sub>、(南本、卷第二十六、T十二・七七五中)

の文に依つた所多大と思える。

又法華教が正因仮性を説く経証として、『中論』の文も引く。先に『法華遊意』中で、法華教も正因仮性を説く事に少しふれたが、その「十種文義」中の第六は、

六者、中論四諦品云、雖<sub>ニ</sub>復勤精進修<sub>ニ</sub>行菩提道、若先無<sub>ニ</sub>仮性<sub>ニ</sub>終不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>成仏<sub>ニ</sub>、長行釈云、如<sub>レ</sub>鐵無<sub>ニ</sub>金性<sub>ニ</sub>雖<sub>ニ</sub>復鍛練<sub>ニ</sub>終不<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>金、若此經不<sub>レ</sub>明<sub>ニ</sub>仮性<sub>ニ</sub>、雖<sub>レ</sub>修<sub>ニ</sub>万善<sub>ニ</sub>、終不<sub>ニ</sub>成仏<sub>ニ</sub>、(T三四・六四二中)

と、『中論』「觀四諦品」の文である。金性のない鐵をいくら鍛鍊しても金を取り出すことが出来ない様に、正因仮性のな

い者がいくら縁因仮性の万善の菩提道を修しても成仏しない。この為、当然法華は万善の縁因成仏のみならず、正因仮性も説いている事になると吉藏は主張する。又『勝鬘窟』中にも、

若し仮性なれば大行大願を起すと雖も、成仏することを得ず。龍樹の云うが如し、鉄に金性なれば、復鍛鍊すと雖も終に金と成らずと。要す本仮性有るに由つて然して後に大行大願を起し、然して後に成仏す。龍樹の云うが如し、黄白の石に金銀の性あるが如し、人功鑪冶するに由るが故に金銀ありと。（卷下之本、T三七・六七上）

と、「觀四諦品」のみならず、『智度論<sup>(5)</sup>』の文をも引用し、正因仮性がまず基本としてなければならない事を主張する。

この様に正因仮性と縁因仮性を認めるが故に、「常不輕菩薩品」中に増上慢にも、授記する事が可能と考える。

「深く汝等を敬う」とは、衆生に正因仮性あることを顯す。（中略）

「菩薩道を行ず」とは、縁因仮性を明すなり。仮性ありと雖も、要す修行を須つて乃ち見ることを得。「當に作仏を得べし」とは、本と仮性ありて今復た因を行はずば、縁正の二因の義を具するが故に成仏を得。（法華義疏、卷第十一、T三四・六一七上）

即ち、「常不輕菩薩品」の「我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作仏<sup>(6)</sup>」の文を、正因仮性と縁因仮性を示す文と解釈する。この様に吉藏は、法華教も縁正の二仮性を説くと主張するから、

若し仮性なくば、一乘教を説き及び菩提心を發すと雖も、終に成仏することを得ず。是の故に須く仮性を明すべきなり。（法華義疏、卷第四、T三四・五〇六上）

と云う解釈をすることになる。しかしこの仮性も、然も仮性は四句を絶し百非を超えたり。實に説くべからず。但無名相中の中に、衆生の為の故に仮名の相をもつて説く。故に方便と云う。（前同貞）

と、本来は無名相であるものを仮りに名相を以て説いたと云う。

## 二、声聞にとっての縁因仮性

所でこの法華教の教化の対象の主は、声聞であることは云うまでもない。即ち、

此の經は四乗を会して同じく一極に帰すと雖も、而も教宗の起る所は正しく声聞と縁覚との為にして、傍に人と天との二乗に及ぶ。（法華義疏、卷第二、T三四・四七〇上）

此の經は正しくは声聞を化し、次に菩薩を化し並に外道に及ぶ。此の三人に則ち總じて一切を收め、同じく仏乗に帰せしむるなり。（前同、卷第三、T三四・四九五下）

と、声聞が主であり、菩薩や人天や外道の教化は傍である。

この声聞と縁覚の中で、成仏する者と成仏しない者は、既に「吉藏の成仏不成仏觀」並びに「吉藏の成仏不成仏觀（二）」中で説いた。又この法華教の教化の対象の主である声聞にも、正因仮性は素より具わっていることも判つた。又、

是の故に一乗を説きたもうとは、菩提心は縁を仮つて起るを以ての故に、仏為に一乗を説いて菩提心を発さしめたもう。一乗教は則ち是れ發菩提心の縁なり。（法華義疏、卷第四、T三四・五〇六上）

と、成仏する為には菩提心を發する必要がある。その菩提心を發する縁が一乗である事も既に論じた。<sup>(7)</sup> この發菩提心の縁となる一乗教を理解出来るのは、摂末帰本法輪にて会三帰一の対象となる声聞であり、この為に法華の教化の主体となるのである。

この一乗教を声聞が信ずる事が、縁因成仏を満すことである。先に、

二者、仮<sub>ニ</sub>信解等法<sub>ニ</sub>以為<sub>ニ</sub>縁因<sub>ニ</sub>、是以法華但明<sub>ニ</sub>二因<sub>ニ</sub>也、

（法華玄論、卷第七、T三四・四二〇中）

と、縁因が「信解等法」である事を引用したが、縁因成仏の

信解とは、声聞にとつては、一乗を信じ更に理解して行く事である。声聞が一乗を信じ廻小入大すると云う事は、

声聞の廻小入大は始めて菩薩の十信の位に入る事を得。（中略）、但十信の初心に入るのみ。（法華義疏、卷第七、

T三四・五四三中）

と、菩薩の十信の初心に入る事である。この為、

又譬喻品に云く、声聞の人は信力を以ての故に一乗に入ることを得と。即ち知んぬ、未だ廻小入大せざれば、十信の前に在りということを。（前同、卷第八、T三四・

五六四中）

と、廻小入大以前は、十信の前の位であると説く。声聞が「信力」を以て一乗に入ると云う「譬喻品」の文は、

汝舎利弗、尚於<sub>ニ</sub>此經<sub>ニ</sub>、以<sub>レ</sub>信得<sub>レ</sub>入、況余声聞、其余声聞、信<sub>ニ</sub>仏語<sub>ニ</sub>故、隨<sub>ニ</sub>順此經<sub>ニ</sub>、非<sub>ニ</sub>己智分<sub>ニ</sub>、（卷第二、T九・一五中）

で、「以信得入」の文を『法華義疏』は次の様に解釈する。

信を以て入ることを得たりとは、則ち是れ經理深くして妄りに伝うべからざるを顯す。問う、二乗は何が故に信を以て此の經に入ることを得たるや。答う、若し低頭拳手等の善を以て此の經の宗となすといわば、聖人豈に解らざらんや。則ち知んぬ、意此に在らずということを。

今は、二乗の断常の心は深く不斷常の法を悟ること能わ

ず、但仰いで信することを得るのみと明す。（卷第六、

### T三四・五四一上)

即ち、声聞はどうして信力を以てして、廻小入大し一乗に入り、菩提心を發し縁因仏性を満すことになるのかと問う。この問に対し、若しただ低頭拳手等の善でもって一乗に入るとなれば、ただ善を行ずる聖人も会三帰一される事になり、これを認める訳にはいかない。又さとりとて、一乗の断常の一見執着の心では、不斷常の一乗の中道の法を理解することも出来ない。この為に、二乗の声聞は唯々、信力により、廻小入大すると主張するのである。

所で『法華論』には

彼声聞等得<sub>ニ</sub>授記<sub>者</sub>、得<sub>ニ</sub>決定心<sub>ハ</sub>（T二六・八下）

と、声聞等に授記するのは、決定心を得させる為と説いてい  
る。この文を吉藏は、『法華論疏』中で、

言<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>決定心<sub>ハ</sub>者、決定者名<sub>レ</sub>信、得<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>十信位<sub>ハ</sub>、非<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>

就法性<sub>ニ</sub>故、（正一・七四・二・一八八a）

と、声聞に授記し決定心を得させるのは、一乗を信ずることであり、菩薩の十信位に入る事であると説く。

以上のごとく廻小入大の声聞にとっての縁因仏性とは、  
「信解等の法を仮る」事であり、信力により菩薩の十信に入

り、發菩提心の縁となる一乗の法を信解する事になる。

### 三、人天の成仏

以上論述して來たごとく、法華教の教化の対象の主は声聞であり、菩薩、人天、外道の教化は傍である事は先に示した。菩薩、即ち直往の菩薩は最初から發菩提心の縁である一乗を学んでいるから成仏する事は問題ないとても、人・天・外道が法華教の教化の対象としては傍であるとなると、成仏の事はどうなるのであらうか。

吉藏が「又五乗作仏と言<sub>ハ</sub>は、五乗の人、一乗より出づるを以て、是の故に五乗同じく一乗に帰<sub>ス</sub>」と云うものの、「三種法輪」説の撰末帰本法輪は、

（前略）至<sub>ニ</sub>今法華始得<sub>ハ</sub>、會<sub>ニ</sub>彼三乗<sub>ニ</sub>歸<sub>ス</sub>於一道<sub>ニ</sub>、即撰末帰

本教也、（法華遊意、T三四・六三四下）

で、法華の一乗に会されるのは、彼の三乗、即ち声聞が主体であつて、人天外道は一乗に会されない。この様な理由により、

答う、二乗は方にはれ仏子なり。人天は未だはれ仏子にあらず。故に五種の仏子の中には、四果と並に縁覚とを謂つて、人天を説かざるなり。（法華義疏、卷第七、T三四・五五六上）

と、二乗は仏子であるが、人天は未だ仏子ではないと述べて  
いる所がある。又先に、

答う、若し低頭拳手等の善を以て此の經の宗となすといわば、聖人豈に解らざらんや。則ち知んぬ、意此に在らずということを。（法華義疏、卷第六、T三四・五四上）

と、「方便品」中に説く低頭拳手等の善を以て、この法華經の宗となすことが出来ぬ事も述べた。この様に吉藏が主張するのは、『法華論』の

乃至童子戯聚沙為<sub>ニ</sub>仏塔<sub>ハ</sub>如<sub>レ</sub>是諸人等皆已成<sub>ニ</sub>仏道<sub>ハ</sub>者、謂發<sub>ニ</sub>菩提心<sub>一</sub>行<sub>ニ</sub>菩薩行<sub>一</sub>者、所作善根能証<sub>ニ</sub>菩提<sub>ハ</sub>非<sub>ニ</sub>諸凡夫及決定聲聞本来未發菩提心者之所<sub>ニ</sub>能得<sub>ハ</sub>如<sub>レ</sub>是乃至小低頭等皆亦如<sub>レ</sub>是、（T二六・七下一八上）

一乘を信ぜず菩提心を發していない凡夫や決定聲聞が、たとえ「拳手低頭」等の善をしても、成仏出来ぬと説く内容によつたと思われる。即ち、發菩提心のない拳手低頭の善では、得仏の為の縁因仮性を満す要因とはならないと説くのである。

当時人天衆は、一乗に入る事が出来ぬと主張する説も有つた。

問う、人天乗は一乗に入るや不<sub>ハ</sub>。答う、有人言<sub>ク</sub>、人天衆は一乗に入らず。凡そ入を論ずれば、是れ趣向なるが故に、人天に入る因は人天の果を得、因を以て果を感じ竟る。是の故に入らずと。（勝鬘寶窟、卷中之本、T

### 三七・四一下

即ち「有人」説は、人天の衆生は一乗に入ることが出来ぬと考えた。それは人天の因はあくまで人天の果を受け、菩薩の果を受けることが出来ぬと考えたからである。

先に示したごとく吉藏も、發菩提心のない拳手低頭の善等では成仏出来ないと説き、この面では有人説と同じ所もある。しかし吉藏は、この有人説に対し、

今明す所は、二乗、一乗に入るあり。一乗に入らざるあり。人天も亦爾り。法華論に云うが如し、人天の善根及び決定の声聞は並に成仏せず。故に要す須らく菩提心を發して方に成仏を得べし。而て今、五乗衆生並に皆成すと言<sub>ウ</sub>は、人天二乗、遠く菩提心の縁と為るを取り、人天二乗に籍て仏菩薩に値い菩提心を發し、然して後に方<sub>ニ</sub>一乗に入つて作仏す。（前同、T三七・四二上）

と、人天衆も一乗に入る事もあり、一乗に入らない事もあると主張する。それは『法華論』に説くごとく、菩提心を發するかどうかに有るからである。人天の拳手低頭の善では、一乗を信じる事と全く異なり、發菩提心の縁とはなりえない

が、しかし發菩提心の「遠縁」とはなりえる。この為、人天の拳手低頭等の遠縁を籍て、仏菩薩に会い菩提心を發すれば、作仏することが出来ると主張する。この「遠縁」に関して『法華玄論』中には、「低頭拳手、皆入<sub>ニ</sub>一乗<sub>一也</sub>」と説き、

一切の善について次の様に説いている。

問、若一切善法作仏者、一切善皆能動出耶、答、一切善亦能動出、所以然者、由有所得善相資故、然後生無所得善、有所得善是無所得遠縁、以此言之、亦有動出之義也、（卷第十、T三四・四四五中一下）

即ち、一切の善は成仏への力となる。たとえ拳手低頭の人天の有所得の善であっても、この善の相い資ける力により、無所得の一乗が生ずる。有所得の善でも無所得への遠い縁<sup>(12)</sup>即ち間接的な縁であり、成仏への力となると主張している。

又、

又五乗同じく仮性あり、故に同じく一乗に入る。法華論に説くが如し、二乗の以に授記することは三乗の人、法身平等なるを以ての故に、常不輕、惡人に記を授くることは、亦衆生に仮性あることを示すが故なり。同じく仮性ありと雖も、要ず須らず菩提心を發して方に作仏を得べし。發せざるものは則ち作仏を得ず。（宝窟、前同、T三七・四二上）

と、まず吉藏は、五乗の人にも三乗人と同じ様に、正因仮性があると云う前提に立つ。その上で、拳手低頭の人天の善は、發菩提心の遠縁となり、最終的には作仏の為の縁因仮性を満すことになるから、人天も一乗に入る事も出来ると主張するのである。

先に縁因仮性に対し、「仮信解等法以為縁因」と云う様に「信解等の法」と解したが、

答、由來云、但明万善縁因成仏耳、（中略）、以有仏性復修行万善、因縁具足乃得成仏也、（法華玄論、卷第五、T三四・四〇四上）

と、縁因仮性を「万善」と解する箇所も多い。これは拳手低頭等の有所得の遠縁をも含んだ縁因仮性を指すと思われる。

吉藏が、人天或は外道までも一乗に入り、作仏出来ると考えを示すものに、「三引法門」<sup>(14)</sup> 或は「三攝法門」<sup>(15)</sup> がある。

第八明三引、釈迦一化始終凡有三引、法華之前、謂引邪帰正、仏未出世、有三種邪法、一者九十六術出家外道、二者一切世俗在家衆生、此二種雖異並非仮法、故名為邪、如來出世引此二邪帰五乘正法、此二種人中有無聞非法者、以入天善根而成熟之、有三乘根性者、以三乘法而化度之、故引此二邪帰五乘之正、二者引異歸同、法華之前雖免二邪、仍執五異、是故引於五異歸乎一乘、即初段意也、三引因帰果、五乘雖入二乘、猶是因位故、引因帰果、令証法身、（後略）（法華玄論、卷第二、T三四・三七三中）即ち第一の「引邪帰正門」は、非法の外道や世俗の衆生であるが、その中の無聞非法の者だけを、人天乗或は三乗にするのである。

化度させ、五乗に導く法門である。第二の「引異帰同」は、五乗の異を一乗に帰す法門である。これらの法門を吉藏が主張するのは、外道や世俗の衆生にも正因仮性があり、更に「有<sub>ア</sub>無<sub>レ</sub>聞<sub>ニ</sub>非法<sub>者</sub>」と云う遠縁の善等を修し、發菩提心への縁因仮性にとつながると考えるからである。人天・外道、世俗の衆生でも、非法を聞く事なく拳手低頭等の遠縁の善を修し、仏に会い菩提心を發すれば一乗に入り作仏を得る事が出来る。

#### 四、吉藏の一闡提

一闡提が成仏するかしないかは、涅槃經で論争された重要な問題であるが、吉藏の云う一闡提とは、

問う、戒は何を以て体とするや、答う、毘曇には色を以て体となし、成論には非色非心を体となす。譬喻と僧祇とは思を離れて報因なく受を離れて報果なしと明す。故に心を以て戒体とせり。今明す、大乗は縁の所宜に適うて定執あることなし。若し定執あらば、即ち諍論を成じて闡提に趣向せん。（法華義疏、卷第二、T三四・四七

四下）

と、毘曇は色を、成實論は非色非心を、譬喻師と摩訶僧祇部は心を以て戒の体とした。これに対し吉藏は、対機に応じて諸説有る事を大乗は認めるのであるから、これであると云う

様に一説に固執する事を否定する。若し一説に固執し定執するならば、諍論を成じて一闡提となつてしまふと説く。即ち吉藏の云う一闡提とは、「諸法無定相」と云う大乗の教えに反して、定執を生じて一説に固執し、これだけが正しいと思ふ人を言うのである。<sup>(16)</sup>

それでは一闡提と一乗の問題をどの様に吉藏は考えるか。

又有三一種闡提、一凡夫闡提、二聖人闡提、凡夫不<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>三界<sub>者</sub>、名<sub>ニ</sub>凡夫闡提、二乘不<sub>レ</sub>信<sub>ニ</sub>一乘<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>聖人闡提、破<sub>ニ</sub>凡夫闡提<sub>ニ</sub>始生<sub>ニ</sub>小信<sub>ニ</sub>、破<sub>ニ</sub>二乘闡提<sub>ニ</sub>始生<sub>ニ</sub>菩薩十信<sub>ニ</sub>也、因<sub>ニ</sub>此轉悟<sub>ニ</sub>方入<sub>ニ</sub>菩薩道<sub>ニ</sub>。（法華玄論、卷第八、

T三四・四二九中）

即ち凡夫闡提と聖人闡提がある。凡夫闡提は凡夫の教えに執着し、出三界を信ぜず、又聖人闡提は一乗の教えに執着して一乗を信じない。この説は真諦三蔵が説いたものである。

真諦三蔵の云く、闡提に二あり。一には凡夫、二には二乗なり。凡夫の闡提は三一を信ぜず。二乗の闡提は三を信じて一を信ぜず。今法華の破三を聞いて始めて菩薩の十信の位に入ることを得。（法華義疏、卷第七、T三四

・五四三中）

即ち真諦三蔵の云う二乗の闡提は、三乗を信じて一乗を信じない事である。しかし法華の教の破三帰一を聞き、今までの固執を捨て一乗に轉悟すれば、菩薩の十信に入る事が出来

る。

この様に吉藏の云う二乗の一闡提とは、三乗のみを固執して信じ、一乗を信じ様としない者を云う。しかし会三帰一を信じれば、二乗の一闡提が廻小入大の菩薩へと転悟出来る。この事は、二乗の一闡提にも正因仮性があるが、ただ發菩提心の縁因仮性が欠けていると考えているのである。

五には衆生に悉く仮性ありと説き一乗の義を成せんと欲するが故に此の品を説く。一切衆生は但だ仮性のみあつて余の性あることなし。故に但だ一乗のみあつて余乗あることなし。旧云く、法華経には但だ善人のみ仮性ありと明して、涅槃經に始めて心あるもの皆成仏を得と弁ずと。今明す、此の品には正しく悪人に仮性あるを弁じ、方便品には一毫の善皆仏道を成すと明す。則ち知ぬ、一切の心あるもの並に仮性あつて皆成仏するなり。

問う、此の衆生は是れ何等の悪人ぞ。答う、小乗を保執して大乗を拒逆する、是れ方等を謗する人なり。又小を執する人は大乗を信ぜず。大乗に於て信なきは是れ一闡提の人なり、即ち是れ極悪の人に仮性あるの義、涅槃經と異なることなし。（法華義疏、卷第十一、T三四・六一六中）

即ちこの「常不輕菩薩品」を説く意は、一切衆生に悉く仮性、即ち正因仮性が有る事を説き、一切衆生を一乗に導く為

だと説く。旧説では、法華経は但だ善人成仏のみを説き、涅槃經に至つて初めて一切衆生皆成仏説を説くと云われていた。しかし吉藏は、この「常不輕菩薩品」に悪人有仮性を説く事が即ち、法華教が一切衆生皆成仏を説くなによりの証拠だと主張する。吉藏の云う悪人とは、小乗を保執して大乗を拒逆し、大乗を信じ様としない一闡提の事である。常不輕菩薩はこの極悪の一闡提にも、正因仮性がある事を認め授記したのであるから、法華経で説く仮性と、涅槃經で説く仮性と同じであると主張するのである。

### 『法華論』中に、

非諸凡夫及決定声聞本来未發菩提心者之所能得、（T二六・七下―八上）

の文がある。この文を吉藏は『法華論疏』中にて、  
此二善根、不得成仏、（T・一・七四・一一・一八三a）  
と、凡夫と決定声聞は未發菩提心者なるが故に不成仏と説く。吉藏の云う一闡提とは、三乗一乗を信じようとしない凡夫闡提と、三乗を信じて一乗を信じ様としない二乗闡提、即ち決定声聞を云う。ともに正因仮性を有しながら、法華の教えを聞き入れず、發菩提心の縁因仮性を欠く者を一闡提と云うのである。

### 五、正因門授記と縁因門授記

二乗に授記することは法華教の重要なテーマである。

又法譬の二説は、声聞をして作仏せしめんが為なり。故に二乗に記を授くるは、是れ此の經の正宗なり。故に偏に之を擧ぐ。智度論に云く、法華經は二乗に記を授けて作仏せしむと。即ち其の証なり。（法華義疏、卷第七、

#### T三四・五四四下）

即ち、二乗に記を授けて作仏させた事は、この法華經の正宗であると説く。これは、

今は声聞の人の、羅漢は成仏せずと言うに對せんが為に、是の故に其に成仏の記を与うるなり。（前同、卷第八、T三四・五六六下）

と、羅漢は法華が説かれる以前においては、成仏出来ぬと思つて、しかし法華にいたつて、二乗に授記し作仏する事を説く。この故に授記を法華教の正宗と云う。

法華にて授記作仏をする為には、まず法華教を聞く事が大前提となる。

問、依<sub>ニ</sub>此釈<sub>ニ</sub>者、則羅漢聞<sub>ニ</sub>法華經、始知<sub>ニ</sub>作仏、不<sub>レ</sub>聞則不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>作仏以不、答曰、如<sub>レ</sub>是、（中略）、故知二乘不<sub>レ</sub>聞<sub>ニ</sub>法華、不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>同帰<sub>ニ</sub>也、（法華玄論、卷第六、T三四・四〇六上一中）

即ち、羅漢が作仏をするかしないかは法華教を聞くか聞かないかにより、又二乗が法華の教えを聞かなければ、会三帰

一も知ることはないと考える。又記を授くるのは、

法を聞き悟解して行仏と應ずるを以ての故に仏記を授けたもう。（法華義疏、卷第九・T三四・五七八中）と、法華の教えを聞き、更に悟解し行仏と應ずるからだと説く。

所で常不輕菩薩の授記には、二つの点よりなされる。

菩薩約二種義故、所以与<sub>ニ</sub>記、一者如<sub>ニ</sub>前明<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>仏性<sub>ニ</sub>故得<sub>レ</sub>与<sub>ニ</sub>授記、二者方便令<sub>レ</sub>發<sub>ニ</sub>菩提心<sub>ニ</sub>故与<sub>ニ</sub>提記<sub>ニ</sub>也、（法華論疏、卍・一・七四・二・一八九a）

即ち、一つには仏性あるが故に授記する。二つには、方便して授記を与えることにより、菩提心を発せさせる為である。この常不輕菩薩の授記は、増上慢の正因仏性に対し授記する。授記にも正因門と縁因門の授記がある。

三根人就<sub>ニ</sub>縁因門<sub>ニ</sub>授記、常不輕就<sub>ニ</sub>正因門<sub>ニ</sub>授記義、各有<sub>ニ</sub>異也、（法華玄論、卷第七、T三四・四二二中）

と、仏性でも縁正の二つがあり、身子や四大声聞等の三根の声聞<sup>(17)</sup>は縁因門授記、又常不輕所対の増上慢は正因門授記であると考へる。正因門授記と縁因門授記とは、

第二二種者、一正因門授記、二縁因門授記、正因門授記者、如<sub>レ</sub>常不輕菩薩說<sub>ニ</sub>四衆皆當<sub>ニ</sub>作仏、然此四衆未<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>信<sub>ニ</sub>一乗<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>、但身中有<sub>ニ</sub>仏性<sub>ニ</sub>必當<sub>ニ</sub>作仏、法華論釈<sub>ニ</sub>常不輕品、一切衆生實有<sub>ニ</sub>仏性<sub>ニ</sub>故當<sub>ニ</sub>作仏<sub>ニ</sub>也、明<sub>ニ</sub>縁因授記

者、如<sub>ニ</sub>法師品、以<sub>テ</sub>信<sub>ニ</sub>法華即<sub>シ</sub>是縁因<sub>ハ</sub>（中略）、縁正二  
因授記広狹者、正因則広善惡等一切衆生皆有<sub>ニ</sub>仏性<sub>一</sub>故、  
正因義広也、縁因但取<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>信解心<sub>ハ</sub>方乃得<sub>ニ</sub>仏記<sub>一</sub>故、狹  
也。（前同、T三四・四二〇中）

と、正因門授記とは、常不輕菩薩品の増上慢の様に、未だ一  
乗を信じていなくとも、「広善惡等一切衆生皆有<sub>ニ</sub>仏性<sub>一</sub>」と云  
う様に、正因仏性があるから授記するのである。これに対し  
縁因門授記とは、正因仏性の上に、更に法華を信すると云う  
縁因仏性を満す者に授記する。この為「一切衆生皆有<sub>ニ</sub>仏性<sub>一</sub>」  
の正因門授記は広義であり、「有信解心」の縁因門授記は狭  
義の授記となる。先に身子や四大声聞等の三根の声聞が縁因  
門授記と述べたのは、

今二乘人、内有<sub>ニ</sub>正因<sub>ハ</sub>、外聞<sub>ニ</sub>法華經<sub>ハ</sub>、生<sub>ニ</sub>信解等善<sub>ハ</sub>、即<sub>シ</sub>縁  
因、縁正具足故得<sub>ニ</sub>授記<sub>一</sub>、（法華玄論、卷第一、T三四・  
三六九上）

と、縁因と正因の一仏性を満すが為である。

しかし常不輕所対の増上慢に正因門授記するのは、有仏性  
と令發菩提心の為である。

法華の常不輕菩薩の如し、増上慢の人をして菩提心を発  
さしめんが為の故に、衆生悉く仏性ありと説く。（宝窟、  
卷下之本、T三七・六七上）

或は、

又衆生は皆一乗あって同じく仏性あり、並に當に作仏す  
べし。（中略）、亦常不輕菩薩の一切を輕んぜざりしが如  
し。此の不輕を作すは、即ち是れ一乗を弘むるなり。

（法華義疏、卷第十、T三四・五九七中）

と、増上慢の人にも最終的には菩提心を発させる為、即ち一  
乗を弘める為であると云う。この正因門授記により、

值<sub>ニ</sub>常不輕菩薩<sub>ハ</sub>者、初謗後信、初謗故千却墮<sub>ニ</sub>無間獄、後  
信故得<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>菩薩位<sub>一</sub>、（法華玄論、卷第七、T三四・四二  
二上）

と、常不輕菩薩所対の増上慢は、初め誹謗したが故に千劫無  
間地獄に墮すが、後に信するが故に廻小入大の菩薩になれる。

次に縁因門授記でも、菩薩に對して授記するのと、声聞に  
對して授記するのでは異なる。

問う、声聞に記を授くると、菩薩に与うると何んが異なる  
や。答う、法華論に云く声聞に記を授くることは、声聞  
に決定心を得しめんとなり。声聞が法性を成就せりと謂  
うには非ざるが故に。如來の法身と声聞の法身とは異なる  
ことなきを以ての故に授記を與う。即ち修行の功德を具  
足せりとには非ざるが故に。菩薩は功德を具足せり、是  
の故に記を得と。（法華義疏、卷第五、T三四・五一七上）  
即ち、菩薩と声聞とに對する授記は、その内容が異なる。

同じ縁因門授記でも、菩薩に対する授記は、修行の功德を具足する為である。しかし声聞に対する授記は、修行が具足し、法性を成就しているからではなく、決定心を得させる為である。その決定心とは、

言得<sub>ニ</sub>決定心<sub>ニ</sub>者、決定者名<sub>レ</sub>信得<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>十信位、非<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>就法性<sub>ニ</sub>故、（法華論疏、正・一・七四・二・一八八a）

或は、

二には發心成立するを名けて發心となす。即ち十信の位なり。（法華義疏、卷第八、T三十四・五六六中）とあるごとく、声聞に菩提心を成立させることであり、菩薩の十信の初位に入ることである。

この様に菩薩に対する授記と、声聞に対する授記に差異を認めるのは、「積劫修行」の必要性を主張する為である。

晚見<sub>ニ</sub>論釈<sub>ニ</sub>受記文、問、声聞人為<sub>ニ</sub>実成仏<sub>ニ</sub>故与<sub>ニ</sub>授記、不<sub>ニ</sub>実成仏<sub>ニ</sub>故与<sub>ニ</sub>授記、若実成仏者、菩薩何故積<sub>ニ</sub>劫修行、若不<sub>ニ</sub>実成仏、將非<sub>ニ</sub>如來虛妄授記、答、授<sub>ニ</sub>声聞記<sub>ニ</sub>者、得<sub>ニ</sub>決定心<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>就法<sub>ニ</sub>故、（後略）、（法華玄論、卷第

一、T三四・三六八下）

即ち吉藏は、『法華論』の内容により、菩薩が積劫修行し功徳を具足しているのと、声聞が決定心を得て十信位に入るの相違を主張して、修行の意味付けを説く。又疑う者の云く、声聞の人法華經を裏けて則ち能く領悟す

るは、現在に記を得て未来に成仏す。若し爾らば何ぞ菩薩の劫を歴て修行することを用いんやと。此の疑を釈せんが為の故に、三根の声聞は久劫より已來曾て大心を發し菩薩の行を修す。但中途に忘失して暫く小果を証せしが、今大乗を聞いて還つて本悟を得たり。故に現在に記を得て未来に成仏すと明す。（法華義疏、卷第八、T三

四・五六八上）

と、実は三根の退菩提心の声聞は、現在こそ声聞であるが、曾ては久劫より大乗の心を發し修行していた。だから声聞が授記され十信に入るにも、積劫の大乗の修行をしているのであり、積劫修行の意義を主張する。

## 六、四種授記と階位

以上の様に菩薩と三根の声聞と常不輕所対の増上慢では、授記の内容が異なる。この為に、授記によつて得られる階位が、声聞や菩薩とでは異なる。吉藏は『智度論<sup>(18)</sup>』の四種授記と階位を対応させる。

釈論有<sub>レ</sub>四、一未發心授記、二發心授記、三不現前授記

亦名<sub>ニ</sub>密授記、四現前授記、（法華玄論、卷第七、T三四・四二一上）

即ち、①未發心授記、②發心授記、③不現前授記、④現前授記の四つである。

第一の未発心授記とは、

二者、依<sub>ニ</sub>首楞嚴經意<sub>ニ</sub>言、其人過去久已発心行<sub>ニ</sub>、但在<sub>ニ</sub>

輕毛位隨<sub>ニ</sub>風東西、未<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>是詔<sub>ニ</sub>、故云<sub>ニ</sub>未発心<sub>ニ</sub>、又此人過去已曾發心、但現在未<sub>レ</sub>值<sub>レ</sub>緣、故云<sub>ニ</sub>未得發心<sub>ニ</sub>、（前同、T三四・四二一上）

即ち曾て發心したが、現在輕毛位にあつたり、或は仏縁に会わなかつたが故に、未だ菩提心を發しない人等に対する授記である。たとえば

問、授<sub>ニ</sub>聲聞記<sub>ニ</sub>亦有<sub>レ</sub>四不、答、就<sub>ニ</sub>法華<sub>ニ</sub>明亦具<sub>レ</sub>四也、

常不輕授<sub>ニ</sub>四衆記<sub>ニ</sub>、謂未発心而授也、以<sub>ニ</sub>四衆未<sub>レ</sub>發<sub>ニ</sub>菩提心<sub>ニ</sub>故、（中略）、是名<sub>ニ</sub>未発心授記<sub>ニ</sub>、（前同、T三四・四二中一下）

と、常不輕所対の増上慢は、未発心授記の一人である。

第二の発心授記とは、

二者、発心授記、如<sub>レ</sub>過去久發心乃至<sub>ニ</sub>現在<sub>ニ</sub>發心<sub>ニ</sub>、故名<sub>ニ</sub>

發心<sub>ニ</sub>、（前同、T三四・四二一中）

と、過去にも菩提心を發し、又現在にも菩提心を發した者に対する授記である。退大為小の聲聞と發軫學小の聲聞に対し、

次明<sub>ニ</sub>得記不得記<sub>ニ</sub>者、若退大為小聲聞、約<sub>レ</sub>位判者、是六心以下人、但是未発心授記也、若發軫學小聲聞亦是未發心授記也、但此二人優劣不同、初人已曾發心、但發心

未<sub>ニ</sub>成就<sub>ニ</sub>故名<sub>ニ</sub>未発心<sub>ニ</sub>、第二人<sub>ニ</sub>都未<sub>ニ</sub>發心<sub>ニ</sub>也、（前同、T三四・四二一下）

と、ここでは共に未発心授記だと述べる。ただ優劣があり、退大為小の聲聞は曾て發心し、現在發心が未成就であるに對し、發軫學小の聲聞は、過去にも現在にも未発心であり、両者には相違があると考える。しかし、「授<sub>ニ</sub>聲聞記<sub>ニ</sub>、亦有<sub>レ</sub>四不」の間に對する答として

發心授記者、約<sub>レ</sub>迹言<sub>ニ</sub>之、三根聲聞並發<sub>ニ</sub>菩提心<sub>ニ</sub>、信<sub>ニ</sub>解一乘<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>授記<sub>ニ</sub>、（前同、T三四・四二一下）

と、退大為小の三根の聲聞は、發心授記<sub>(19)</sub>であると述べている。退大為小の聲聞が授記を受ける直前までは、未発心で、授記を受けた直後決定心を得、十信に入るから、發心授記と云う事と思われる。發軫學小は未発心なるが故に、第一の未発心授記を与えられると云う事になるかと思われる。

第三の不現前授記とは、

第三不現前授記者、唯他人知而自不<sub>レ</sub>知、故名<sub>ニ</sub>不現前也、（前同、T三四・四二一中）

と、自分自身は授記された事を知らない授記である。その理由は、

其人若自聞<sub>ニ</sub>授記<sub>ニ</sub>、則生<sub>ニ</sub>懈怠<sub>ニ</sub>、（中略）、他見<sub>ニ</sub>其積行既久<sub>ニ</sub>、又崇<sub>ニ</sub>仰之<sub>ニ</sub>而不<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>得記<sub>ニ</sub>、今聞<sub>ニ</sub>得記<sub>ニ</sub>則他聞發心也

と、①当人が授記を聞けば安心して、懈怠を生ずるおそれがある為、②他から崇拜されている者が、得記される事を聞けば、他も菩提心を發する為とする。

#### 第四の現前授記は

第四現前授記、即是無生忍也、（前同頁）<sup>(20)</sup>  
と無生忍の位である。「猶恐解怠不現前授記」とあるごとく、第三の不現前授記は、当人が授記を聞くと懈怠を生ずる恐れがある位である。しかし第四の現前授記は、当人に授記を知らしても懈怠を生じない位である。その懈怠を生じない位が、無生忍と云う訳である。吉藏は、

論云、初地無生、七地無生也、（前同頁）

と、初地と第七地の二地を無生と考えるから、「南方旧」説と「北方論師」説の一説に対し、「評曰、皆有二義」と両説認める。この為次の様な二説を法華玄論では述べる。

問、授記何故不多不少但立四耶、答、拠位論之撰

授記尽、未発心授記、從具縛凡夫至六心退位也、  
発心授記、從七心已上至三十心也、不現前、初地至六地也、現前、七地至三十地也、又未発心、外凡前人

也、発心、始入外凡位也、不現前、内凡三十心也、

現前、登地至三十地、撰位既周、故但明四種也、（前同、T三四・四二二中）

即ち最初の説は、「南方旧」説と同じで、未発心授記が凡

夫から第六心まで、発心が第七心から十住十行十廻向まで、不現前が十地の初地から第六地まで、現前が第七地から第十地までである。第二の説は、「北方論師」説と同じで、未発心授記は外凡即ち十信以前で、発心授記は十信の外凡位で、不現前は内凡の十住十行十廻向の三十心で、現前授記は十地の初地から第十地までである。『法華義疏』では、

又四種の授記あり。一には未発心授記、二には発心授記、三には現前授記、四には不現前授記なり。未発心授記に二あり。一には都べて未だ発心せざるに而も授記す。鳩鳥等の如し。二には已に発心すと雖も、而も未だ成立せず。亦未発心と名くるなり。二には已発心授記に二種あり。一には初始めて発心するに即ち授記を与う。二には発心成立するを名けて発心となす。即ち十信の位なり。

三には不現前授記、謂く、三賢の菩薩なり。未だ無生忍を得ざるが故に、現前に無生の記を与うるに堪えず。四には現前授記、初地已上に無生忍を得れば、為に現前に無生の記を授くるに堪えたり。（卷第八、T三四・五六六中）

と、『法華玄論』の第二説、即ち北方論師説の方のみを記している。「声聞の廻小入大は始めて菩薩の十信の位に入ることを得」、或は「決定者名信、得入三十信位」等のことからすれば、吉藏は二説容認するものの、第二説の北方論師説

に立つと思われる。以上を纏めると次の様になる。<sup>(25)</sup>

授記		南方旧説	北方【論 師 説
未発心	凡夫～第六心	十信(外凡)以前	常不輕所対の増上慢
発心	第七心(十住十行十廻向)	十信	發転学小の声聞
不現前	初地～第六地 (十住十行十廻向)	内凡三十心 三賢の菩薩	
現前	第七地～第十地 初地～第十地	無生忍	

尚、先の論文で示したごとく、決定の声聞と五千の増上慢声聞は、

決定と増上慢との二人は、根未だ熟せざるが故に仏授記を与えず。然して決定の声聞は小乗を保執し、増上慢の人々は自ら究竟と謂いて作仏を信ぜず。即ち記を与うるに堪えず。亦破執及び会帰の義に堪えず。(法華義疏、卷

### 第八、T三四・五六五上)

と、小乗を保執し、或は作仏を信じないが故に、仏より授記をされない。<sup>(26)</sup> 又縁覚に関しては、

一には縁覚の果人は但三界の外に在り。法華經を聞くも亦三界の外にして記を得。二には縁覚の因人と及び声聞

の因位とは、並に三界の内に在つて經を聞き記を得。

(前同、T三四・五六六下)

と縁覚の果人は三界外にて法華經を聞き得記し、又縁覚の因人は三界内にて法華經を聞き得記する。<sup>(27)</sup>

### 七、理仏性・行仏性と正因仏性・縁因仏性

以上長々と論じて來たが、述べたかった事は、吉藏が正因仏性と縁因仏性を説く事にある。正因仏性は、一切衆生悉有仏性の内容に相当し、この為一闡提を含む一切の衆生に対しても、正因門授記が可能となる。しかし正因仏性があるだけで得仏出来るならば、積劫の修行、一切の精進が不要となり、ついには法華の教えを聞かなくても得仏する事になってしまふ。そこで吉藏は、信解等の善と云う様に一乗を聞き、

發菩提心の縁となる縁因仏性の必要性を説いた。吉藏が法華經と雖も決定と増上慢の声聞を不成仏と主張するのは、法華の教えを聞こうとしない無發菩提心、即ち縁因仏性を欠いた者と考えるからである。

この吉藏の正因仏性と縁因仏性の考えは、法相の理仏性と行仏性と、言葉こそ異なるものの、基本的には一致する内容である。基(六三二一六八二)の『法華玄贊』には、

然るに性に二有り。一は理性にして勝鬘に説く所の如来蔵是れなり。二には行性、楞伽に説く所の如來蔵是れな

り。前は皆之有り、後の性は或は無し。（後略）（卷第一之本、T三四・六五六上）

と、理仏性は皆有るが、行仏性は有る人もあり、無い人もあると説く。この『玄贊』の文を『望月仏教大辞典』の「仏性」中には、次の様に記す。

之に關し窺基は仏性に理仏性行仏性の別ありとし、一切衆生悉有仏性と説くは理仏性に約し、唯菩薩種性及び不定性にのみ有りと説くは行仏性に約すとなせり。（第五卷、四四五六頁）

即ちこの解釈は、正因・縁因と理・行の名は異なるものの、両者間の基本的な考えは類似する。しかしこの基の理仏性行仏性の淵源は、

蓋し理性行性の説は元と慧遠の主唱に係るものなるが如く、彼の大般涅槃經義記第九下に「理性は一味にして上下義斎しきも、行性差殊して前後等しからず」<sup>(28)</sup>と云い、理性は本有なるも、行性は始有なりとなせり。今窺基の理行二性の説は恐らく之に基き、以て其の義を成立せしものなるべし。（前同頁）

と、淨影寺慧遠（五一三—五九二）の理性と行性に求める。

この望月説を完全に否定する資料を現在持ち合わせていないが、しかし吉藏の影響も間接的な方法ながら云えると考える。第一点は、淨影寺慧遠の『大般涅槃經義記』の理性と行

性によつて、直接影響を受けたかどうかと云う事が証明出来てないからである。何せかと云うならば、理性・行性と云う言葉は、地論師説として一般に知られていたと思われるからである。『大乘玄論』の「仏性義」中には、

但地論師は云わく、仏性に二種あり、一は是れ理性、二は是れ行性なり。理は物の造るに非ざるが故に本有と言ひ、行は修に藉つて成するが故に始有と言ひ。（卷第三、T四五・三九中）

と、地論師説の理性と行性の文を引用している。この様に理性行性の文を三論宗でも引用しているのであるから、『玄贊』の理性と行性の内容は、一般によく知られた地論師説を、間接的に受け入れたとも考へる事が出来るからである。

第二の理由は、法相宗の人々が吉藏の著書を参照しているからである。既に吉藏の『法華義疏』を、『法華玄贊』や『大乗法苑義林章』が引用している事を指摘した。しかしこれのみならず、法相宗第二祖慧沼（六五〇—七一四）の『法華玄贊義決』中には、

吉藏法師略陳三十義、一說菩薩道、二受梵王請、三顯

三世仏權實二智、四說三淨、五說三攝法門、六說三種法門、七為三斷疑、八說三中道、九增三念佛三昧、十為三世衆生如實分別罪福二門、（後略）（T三四・八五九上）

或は、

次解<sup>レ</sup>喻者、華有<sup>ニ</sup>衆多、何故獨拳<sup>ニ</sup>蓮華<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>喻、答、吉  
藏法師云、略有<sup>ニ</sup>三義、一者離喻、二合喻、三者通喻、  
(後略)、(T丁三四・八六一中)

と、吉藏の『法華遊意<sup>(29)</sup>』の文を引用している。法相の理性行  
性等の思想概念が進展していく中においても、亦た吉藏の著  
書は参照されていたと思われるからである。

第三の理由は、既に論述したごとく理性行性と正因縁因の

言葉こそ異なるものの、基本的には極めて一致しているから

である。保坂玉泉博士は、慧沼の『慧日論』の仮性に関して、

然るに『慧日論』には仮性に理仮性・行仮性の二を分  
ち、理仮性から言えば真如の理は一切衆生平等に悉有な  
れば一切皆成仏可能なりとし(極言すれば草木国土も真  
理を具有する故悉皆成仏するという)。然るに行仮性は  
真如の智行であるから一切衆生に必有にあらず、従って  
五姓の如く成仏不成仏の差別を認めねばならぬ。(「五姓  
各別と成仏不成仏の問題」『駒沢大学研究紀要』第十六  
号、昭和三十三年三月、十頁)

と、理仮性と行仮性の内容をこの様に纏め、又一切皆成仏の  
内容を法相宗では次の如く談ずるとする。

一切皆〔少分一切(不定姓)<sup>菩薩定姓</sup>——行仮性〕成仏

先の「五、正因門授記と縁因門授記」中、一切衆生皆有仏  
性の正因門授記は広義であり、法華教を聞き有信解心する縁  
因門授記は狭義である事等を論じた。これらの吉藏の内容  
を、法相宗の上の図に対応させて示すならば、

一切皆〔狭義一切(法華教を聞こうとしたい決定と増上慢等の一闇提以外の一切の衆生)——縁因仮性〕成仏

廣義一切(広善惡等一切衆生)——正因仮性

と云う事になる。

両者は異なる点もあるが、基本的内容は一致する。異なる点の  
一つが理仮性行仮性と、正因仮性縁因仮性の名称である。吉  
藏も地論師の理仮性行仮性の思想的影響は少なからずとも受  
けているであろう。先に示した「仮性義」中で引用する地論  
師の理性本有、行性始有説に対し、

若し理性は本有にして始に非ず、行性は始有にして本に  
非ずと言わば、更に執して病を成じて聖教は薬に非ざる  
べし。而も世間淺識の人は、但其語のみを見て定んで以  
て是と為し、以て迷執を成す。(大乗玄論、卷第三、T  
四五・三九中)

と、これのみが正しく、他の説は誤つていて定執する事を  
否定している。先に述べたごとく吉藏は、仮性と云うものは  
四句を絶し百非を超えた無名相と考えるが、衆生の得悟の方  
便の為に、仮りに名相をもつて説く。仮名相であり固執すべ

きでないにもかかわらず、既に定執され迷執を成じた理性行

性の語では、吉藏の仮性の思想内容を示すことが出来なかつたか。この為涅槃經の正因・縁因仮性の語を借りて、新たに吉藏自身の思想内容として示したものと思われる。吉藏の正因縁因仮性の影響を、三つの理由からでは、法相宗が受けたと云う確實なる根拠とはならないであろうが、しかし全く影響関係がなかつたと云う事も出来ないと考えられる。地論、三論、法相の影響関係は今後の研究課題としたい。<sup>(追記1)</sup>

### 結 言

吉藏は涅槃經に依り、正因仮性と縁因仮性を説く。正因仮性とは、「廣善惡等一切衆生皆有仮性」で、あらゆる衆生、一切の心あるものに仮性がそなつてていると考える。縁因仮性とは、「信解等法」で、法華教を聞き、一乗中道の法を信解することである。あらゆる衆生に本来備わっている正因仮性の上に、更に一乗を信解すると云う縁因仮性が加わって、初めて成仏出来ると主張する。即ち、一切衆生悉有仮性であつても菩提心を發し、無所得中道の修行がなければ、成仏出来ないと考(追記2)える。

しかし断常の有所得心の声聞にとつては、不斷常の一乗中道の法を悟ることは出来ない。この為但だ一乗の法を信じるのみであり、廻小入大して最初、菩薩の十信の初位に入るこ

ととなる。

又人天外道でも、無聞非法の者ならば、たとえ有所得の挙手低頭の善を修しても、發菩提心の遠い縁因仮性となる。遠縁を修しても、仏に会い菩提心を發するならば、一乗に人天外道でも入ることが出来る。

以上の様に一切衆生悉有仮性と考えるから、たとえ一闡提にも正因仮性が有ると考える。凡夫の一闡提は三乗一乗を信ぜず、又二乗の一闡提は三乗のみを信じて一乗を信じない。吉藏の云う一闡提とは、法華の一乗の教えを聞かず、自説に固執する縁因仮性の欠けた、決定声聞や増上慢声聞の事である。

又正因仮性と縁因仮性を説くから、正因門授記と縁因門授記がある。正因門授記は、正因仮性に対し授記するもので、正因仮性を有する常不輕菩薩所対の増上慢がこれに相当する。又正因門授記は、増上慢の人にも菩提心を發せさせ、一乗を弘めんが為のものである。次に縁因門授記は三根の声聞に決定心を得させる為であり、修行の功德が具足しているからではない。即ち決定心を得、菩薩の十信位に入り菩提心を成立させる為である。この故に積功修行し功德を具足した菩薩の授記とは異なる。

又この為未発心授記と発心授記と不現前授記と現前授記とではそれぞれ階位が異なる。即ち未発心授記は十信以前、発

心は十信、不現前は内凡の三十心、現前は初地から第十地、

或は未発心授記は凡夫から第六心、発心は第七心から内凡の

三十心、不現前は初地から第六地、現前は第七地から第十地に、それぞれ授記される。

又吉藏の正因仮性・縁因仮性と、法相の理仮性・行仮性の

考えは、基本的内容では良く一致し、吉藏の著書を法相が参考照しているが故に、理仮性・行仮性の考えに影響を与えたと推測する。

吉藏はどうして不成仮説を主張したのか。次回この点に関して論述する予定である。

註

(1) 駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十五号、昭和六十二年三月  
(2) 駒沢大学仏教學部論集、第十八号、昭和六十二年十月、  
(3) 吉藏の正因仮性と縁因仮性に関しては、奥野光賢「吉藏の『法華論』の依用について—七處に仮性有りの文をめぐって—」

〔『仏教學』第二十一号、一九八七年三月、四七一五一页〕が参考になった。

(4) 卷第四、T三〇・三四上、

(5) 如「黃石中有金性、白石中有銀性、如是是一切世間法中皆有涅槃性、諸仏賢聖以智慧方便持戒禪定、教化引導令得是涅槃法性」(中略)、鈍根者方便分別求之乃得法性、譬如大治鼓、石然後得金、(卷第三十二、T二五・二九八中)

(6) 卷第六、T九・五〇下  
「吉藏の『一大事因縁』について」(駒沢大学仏教學部論集、第十七号、昭和六十一年十月)の「三、一乘教則是發菩提」

提心縁也」(三一〇—三三三頁) 参照。

註7 同論「四、中道一乘」(三二三—三二四頁) 参照。

勝鬘宝窟、卷中之本、T三七・二四上、  
「或有レ人礼拝、或復但合掌、乃至拳一手、或復小低頭、

以此供養像」(T九・九上) 等の文を指す。

卷第十、T三四・四四五中。

詳細は註7 同論同頁参照。

法華玄論、卷第七、T三四・四二〇中  
「復次欲明三引法門故說是經」(法華玄論、卷第一、T三四・三六五下、或は同卷第十、T三四・四四四上一中)。

〔三引法門〕の名称が『法華遊意』では「五者、欲説三攝法門」故說此經」(T三四・六三四中)と「三攝法門」の名に変化する。  
詳細は拙論「吉藏の唯悟為宗について」(駒沢大学仏教學部論集、第十五号、昭和五十九年十月)、又「吉藏の無礙無方について」(前同論第十六号、昭和六十年十月) 参照。

三根の声聞に関しては、註2 「二、以仏道声令一切聞声聞について」(一五七一—六一頁) 参照。  
「得授記」有二種、一者現前授記、二者不現前授記」(卷第七十六、T二五・五九七上) と二種の授記の名あり。

又他に「如三根声聞、發菩提心故、是發心授記、面從、仏受、為現前受記也」(法華玄論、卷第七、T三四・四二二中) と、三根の声聞は發心授記とある。尚ここで云う現前受記は、仏より面り受けるから現前授記と云うのであって、ここで論じようとしている第四の懈怠心を生じない現前授記とは内容が異なる。

法華玄論、卷第七、T三四・四二一中  
平井俊栄著『中國般若思想史研究』「四、二智の並觀」(六〇七一六〇九頁) 参照。又『大智度論』に「從初地乃至七地

得無生法忍」(卷第一百・T二五・七五三下) とある。

(22) 法華玄論、卷第七、T三四・四二一中  
 (23) 法華義疏、卷第七、T三四・五四三中、  
 (24) 法華論疏、卍一・七四・二・一八八a。  
 (25) 尚水野弘元「五十二位等の菩薩階位説」中には「次に嘉祥大師吉藏は一般説と同じく、五十二位を説き、十信を外凡とし、十住（十解）、十行、十廻向を内凡とし、初地以上を聖位としている」（仏教学、第一八号、一九八四年十月、一八頁）の指摘あり。又発転学小を未発心授記に、退大為小の声聞を発心授記、即ち廻小入大して十信の菩薩と先に述べた。

これは、「問う、二人何か異なる。答う、本乗の声聞は昔大乗を聞かず、未だ菩提心を發せず、一乗の種子なし、無余に入りて後、仏に値い経を聞いて、方に乃ち菩提心を發す。退菩提心の声聞は、昔曾て一乗を聞き菩提心を發して一乗の種子あり、但し中途に大乗を退して小を取る。現在に一乗経を聞き、続いて菩提心を發し、自ら作仏を知る。故に二人異なると為す」（宝窟、卷下之本、T三七・六〇上、尚、註1同論「四、本学小乗と退菩提心の声聞」二八三—二八六頁参考照）と、発転学小は現在も未発菩提心者で、退大為小は現在再び菩提心を發するからと云う理由によつた。『法華義疏』の「四種授記」で云うならば、退大為小は已発心授記中の第二に、又発転学小は未発心授記中の第二か、或は已発心授記中の第一かと思われる。これらの不充分な結果に関しては今後の検討課題とした。

註1 同論（二八六—二八八頁）参照  
 註2 同論（一七〇—一七三頁）参照。

(26) (27) (28) (29) 慧遠の『大般涅槃經義記』卷第九（大正大藏經第三十七）にはこの文不明（？）。  
 「今略序ニ綱要ニ開為三十門、一欲ニ諸菩薩説菩薩行故、説是經、……二者欲ニ梵王請故、説是經、……三者欲明ニ十方三世諸仏權實ニ智互相資成故、説於此經、（中

（追記1）本学の吉津宜英教授に「吉藏の成仏不成仏観」の抜刷を送りした所、①吉藏と基の関係の大きい事了解、②又淨影寺慧遠と基の成仏不成仏の思想には重要な関係があり、現在研究中との旨の御返事をいただいた。吉津教授の成果等を含め検討していきたい。

（追記2）奥野光賢氏より、私の不成仏説を否定すると思われる内容が提示された（「吉藏の法華論の依用をめぐって」駒沢大学仏教學部論集第十八号、昭和六十二年十月）。私のこの論文は、奥野説参照以前に提出したもので、奥野説に答える形で論述していない。吉藏に対する解釈の相違点は、奥野説が決定声聞等でも菩提心を發し縁因仮性を満たすと考えるに対し（三七九—三八〇頁）、私は以上論述したことく縁因仮性を欠くと考える。又奥野説の「この立場からは基本的に五姓各別説は認められるわけがないのである」（三八〇、三八二頁）の「この立場」とは、吉藏の正因仮性の面と思う。正因・縁因仮性を明確に分け、決定声聞等にも縁因仮性があるのか、奥野氏に論証してもらえればと思う。又奥野氏は「以仏道声令一切聞」と「応化声聞」を強いて対応させた（註12）。両声聞の相違は「吉藏の成仏不成仏観」中（三五四—三六二頁）で論じた。奥野氏が強いて対応させたものの、私の説を誤りとした理由が記してない為 私が訂正する必要があるのかどうか不明である。この論文の内容にて、奥野説に答えていると考へるが、「吉藏の成仏不成仏観（四）」中にて、返答するつもりである。